# 宮沢賢治「文語詩稿　一百篇」評釈　五

信時哲郎

## 43　朝

①旱割れそめにし稲沼に、　いまころころと水鳴りて、
待宵草に置く露も、　睡たき風に萎むなり。
②鬼げし風の襖子（あをし）着て、　児ら高らかに歌すれば、
遠き讒誣の傷あとも、　緑青いろにひかるなり。

### 大意

日照りによって割れはじめた稲田に、今、水がころころと音をたてて注ぎ始め、待宵草におりた露は、眠気を誘うような風に吹かれて萎み始めている。

鬼芥子のような赤い襖子を着て、子供たちが高らかに歌をうたっていくと、水争いで悪口雑言を投げ合った傷跡も忘れたように、緑青色の稲が光っている。

### モチーフ

独居自炊生活を始めてまだ間もない頃に取材した作品。大正十五年の旱魃が終わる劇的な瞬間に立ち会ったのだろう。「讒誣」とは、農民たちとの諍いの記憶や旱魃の際の水争いの記憶などが反映されているのかもしれないが、下書稿の書入れに「春の間の讒誣」とあり、また、文語詩定稿にも「遠き」とあることからすると、下根子に居を移す頃のいざこざ、あるいは農学校や父との関係、経済的な事情などを指しているのかもしれない。ただ、いずれにしても旱魃が終わったことに対する喜びと感謝を詠ったものであることには違いない。

### 語注

**旱割れ**　日照りによって稲田にひびが入ること。先行作品は、賢治が独居自炊生活を始めた大正十五年に書かれているが、この年は旱害（その後に水害）の被害が大きかったという。木村東吉（「資料と考察『春と修羅　第三集』『詩ノート』創作日付の日の気象状況」『近代文学の形成と展開　継承と展開8』和泉書院　平成十年二月）が盛岡気象台・水沢天文台で調べた結果によれば、「前日の夜は、盛岡と水沢で雷光を伴う雨」が記録されており、「この日は、早朝の雨も夜明け前には上がり、ちょうど日の出前の時刻に出ていた霧も八時ころまでには晴れ、午前中良い天気で気温も上がった」という。

**待宵草**　南米原産のアカバナ科マツヨイグサ属の越年草。初夏から秋にかけて黄色い花を夕方に咲かせ、朝を迎える頃にはしぼんで赤くなる。「朝」と題された作品であることから、ここでの花色は赤かったことになる。しかし、先行作品である「七二七〔アカシヤの木の洋燈（ランプ）から〕一九二六、七、一四、」下書稿(一)には「月見草」とあるので、もし月見草であったとすれば白い花が翌朝になってピンク色になっていたことになる。もっとも『定本語彙辞典』にあるように、「一般に待宵草をすべて「月見草」の名で総称している場合が多い」とあることから、どちらかに限定することはむずかしい。

**鬼げし**　地中海から中近東を原産地とし、日本では明治時代以降、観賞用として栽培されるようになった一年草。花径は十五〜二十センチほどで、赤、白、ピンクなどの色が咲く。『世界大百科事典』には、ケシは安眠、多産、そして死と復活の象徴とされる、とある。「鬼げし風の襖子」とは、赤い色の襖子のことを言いたかったのではないかと思う。

**襖子**（あをし）　裏地をつけて仕立てた着物を袷というが、綿を入れることもあった。黒塚洋子（後掲）は、「襖子は袷や綿入れの衣なのでやはり冷夏を想像させる」と書いている。

**讒誣**　事実とは異なるいいがかりをつけて、相手をそしること。読み方は「ざんぶ」。

## 評釈

「春と修羅　第三集」所収の「七二七〔アカシヤの木の洋燈（ラムプ）から〕一九二六、七、一四、」を文語詩に改作したもの。黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた「七二七〔アカシヤの木の洋燈（ラムプ）から〕」の下書稿㈡に文語詩の下書稿㈠（タイトルは「朝」。以降も同じ）、その余白に書かれた下書稿㈡（青インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の三種が現存。生前発表なし。

黒塚洋子（後掲）は、ラ行音を効果的に用いていること、各行ごとに色を織り込んでいること、「睡たき風」と「鬼げし風」をカゼとフウに使い分けて対にしていることなどの技巧について指摘し、さらに「流れるように歌われる三行目までは清音で描かれた明るく楽しい叙景であるのに対して、第四行目はそれをさえぎるように「讒誣」という濁音が入り、悲しさとやるせなさを秘めた私的体験の心情表現であるという点が注意をひく」と書く。

黒塚はそこから内容の検討に入り、「賢治は羅須地人協会時代の当初から「讒誣の傷」にかなり悩まされこだわっていたことがわかる」とし、数篇の詩をあげながら、「農民への同化を願いながらも彼等の封建性や頑迷さに苦しみその習慣を嫌悪する賢治の姿と、教師上がりの百姓など我々の仲間ではないと拒絶し中傷する農民の姿が浮かんでくる」とする。大角修（後掲）も、「農民のために無償で働きながら非難されたりしたことを意味すると思われる」としている。

ただ、伝記的に考えれば、羅須地人協会はこの年の八月二十三日（旧暦の七月十六日）に設立されたということから、まだ農民との間にはあまりトラブルも発生していなかったように思うし、旱魃を扱った作品であることから、水争いであった可能性についても考えてよいかもしれない。独居自炊時代に賢治は稲作をしていなかったが、例えば散文「〔或る農学生の日誌〕」の「一千九百二十六年六月十四日」の章には次のような記述がある。

> 水が来なくなって下田の代掻ができなくなってから今日で恰度十二日雨が降らない。いったいそらがどう変ったのだらう。あんな旱魃の二年続いた記録が無いと測候所が云ったのにこれで三年続くわけでないか。大堰の水もまるで四寸ぐらゐしかない。
>
> 夕方になってやっといままでの分へ一わたり水がかかった。
>
> 三時ごろ水がさっぱり来なくなったからどうしたのかと思って大堰の下の岐れまで行ってみたら権十がこっちをとめてじぶんの方へ向けてゐた。ぼくはまるで権十が甘藍の夜盗虫みたいな気がした。顔がむくむく膨れてゐて、おまけにあんな冠らなくてもいゝやうな穴のあいたつばの下った土方しゃっぽをかぶってその上からまた頬かぶりをしてゐるのだ。
>
> 手も足も膨れてゐるからぼくはまるで権十が夜盗虫みたいな気がした。何をするんだと云ったら、なんだ、農学校終ったって自分だけいゝことをするなと云ふのだ。ぼくもむっとした。何だ、農学校なぞ終っても終らなくてもいまはぼくのとこの番にあたって水を引いてゐるのだ。それを盗んで行くとは何だ。と云ったら、学校へ入ったんでしゃべれるやうになったもんな、と云ふ。ぼくはもう大きな石をたたきつけてやらうとさへ思った。
>
> けれども権十はそのまゝ行ってしまったから、ぼくは水をうちの方へ向け直した。やっぱり権十はぼくを子供だと思ってぼくだけ居たものだからあんなことをしたのだ。いまにみろ、ぼくは卑怯なやつらはみんな片っぽしから叩きつけてやるから。

もちろんこれは創作だが、大正十三年から十四年、十五年と三年連続して旱害に

襲われたことは事実で、「〔或る農学生の日誌〕」における「一千九百二十六年六月十四日」と言えば、取材時とも近いことから、大正十五年当時、賢治が旱害についてどう思っていたかを考える材料にはなるだろう。

　しかし本作の先行作品である「七二七〔アカシヤの木の洋燈（ラムプ）から〕」の下書稿㈡の書入れには、「かあいさうに莢豌豆のレアカーを引いて／春の間の讒誣の傷を／緑青いろに胸にひからせ／アカシヤのラムプのなかを」という書き込みがある。下書稿㈠の手入れ段階で「レアカー」のことを「おれの車」と書いていることから、賢治自身が町にレアカーで莢豌豆を売りに行ったことを書いているのだとも思われるのだが、だとすれば、「おれ（＝賢治）」にとっての「讒誣」と思われるような出来事は「春の間」に起こったことにならないだろうか。

　もっとも下書稿㈡の書入れは後年のもので、文語詩化直前のもののようにも思えるので、虚構化されている可能性もないわけではない。「かあいさうに」という語も、普通は自分自身に向って使う言葉でなく、第三者に向って使う言葉である。

　ただ、そうした可能性をおいて伝記的に考えれば、「春の間の讒誣」というのは大正十五年の三月か四月頃、つまり、まだ農学校在職中、でなくても独居自炊生活を始めたばかりであったことになり、農民とのトラブルではなく、農学校での問題、あるいは父との確執などのことを指している可能性もありそうだ。

　また、下書稿㈠の手入れ段階には「棘ありてかつなつかしき／負債に就て追懐せよ」の言葉もある。『新校本全集』の年譜をめくってみても、特に「負債」にあたるような内容は見当たらない。ただ、四月四日の記事には、賢治が移り住んだ下根子桜の別荘について、「一九一二（明治四五）年に祖父喜助が建てた家なのでかなり手入れが必要であったことと目的による改装もあり、大工の手を離れたあとは「多く自分ひとりでやった」」という別荘の隣に住んでいた伊藤忠一による証言もあるので、この際に負債を負ったのかもしれない。ただ、年譜には六月三日には県知事に宛てて「一時恩給請求書」を書き、七日には五二〇円の支給手続きを取っているともあるので、賢治が経済的にそれほど困窮していたわけでもなさそうだ。

　ともあれ、稲沼には水が流れ出したことが、人間世界のいざこざをすべて吹き飛ばしてしまうかのような喜びであったと書くことが、本作の主意であったことにかわりはなさそうだ。

　佐藤隆房（「大旱魃」『宮沢賢治　素顔のわが友』桜地人館　平成八年三月）は、こんなエピソードを書いている。

> 　大正十四年、岩手県は特記すべき大旱魃でした。何しろ、今生きている人たちが一度も経験したこともない大旱魃だけに、村という村、家という家、人という人、一人として心配しない者はありません。
>
> 　その時、賢治さんは農学校で水田を受け持っていました。指導機関である学校の水田だけに責任も心配もなみたいていではありません。暇があれば生徒を連れて行って、低い堰（せき）の水を桶で田に掻き入れる作業をしていました。
>
> 　暑さは暑いし、旱（かわ）くのは旱くし、生徒も先生も本当に血みどろの働きです。
>
> 　こうした毎日の奮闘に、筋も骨も焼き切れて、はや百計尽きようとしたある日です。雲行きが急に変になって来たかと思う間に、待ちに待った夕立が降って来ました。降って来たのです。みんなはただ呆然（ぼうぜん）として嬉し涙にくれています。すっかり喜んでしまった賢治さんは、上着も帽子も靴も脱ぎ
>
> 「ああ面白い、ああ気持ちいい。このままいつまでも草といっしょに濡（ぬ）れていたい」と言って、田圃の畦をひょこひょこと歩いて、遥か向こうの方の田の端まで踊るように行ってしまいました。

佐藤は大正十四年のことだというが、翌年の十五年は「あんな旱魃の二年続いた記録が無いと測候所が云ったのにこれで三年続くわけでないか」とされた年なので、水がころころと鳴れば、子供たちの歌声さえも高らかに聞こえ、「讒誣の傷あと」さえも「緑青いろにひか」っているように感じられたというのも無理はない。

ただ、農村の幸福を描くにしても、「鬼」や「讒誣」といった禍々しい語を配置するなど、甘く平和なだけの作品にはしていないことにも着目しておきたい（黒塚の指摘したように、ラ行音だけでなく濁音を配置したことも含まれよう）。甘いだけの作品にはしたくなかったようである。

**先行研究**

黒塚洋子「朝」（『宮沢賢治　文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
島田隆輔「〈写稿〉論」（『宮沢賢治論　文語詩稿叙説』朝文社　平成十七年十二月）
大角修「おわりに」（『「宮沢賢治」の誕生』河出書房新社 平成二十二年五月）

## 44　〔猥れて嘲笑めるはた寒き〕

①猥れて嘲笑めるはた寒き、　凶つのまみをはらはんと
　かへさまた経るしろあとの、　天は遷ろふ火の鱗。
②つめたき西の風きたり、　あららにひとの秘呪とりて、
　粟の垂穂をうちみだし、　すすきを紅く燿やかす。

**大意**

馴染んでうちとけすぎて笑い顔を見せるのは寒々しく思われ、そんな目を避けようと、
帰り道でまた通り過ぎる城跡から、夕焼で赤く染まったうろこ雲が空を流れるのが見える。
冷たい西からの風が吹いてくると、呪文のように口にした秘めたる恋人の名を荒々しく奪い、
エノコログサの穂をざわめかせ、ススキにも赤い夕陽を映えさせていった。

**モチーフ**

稗貫農学校時代の賢治には、想いを寄せていた女性がいたようだが、その名前を口にしたところ西からの風に奪われていったという純情な詩のようだ。ただ、「猥」、「嘲笑」、「凶つ」、「火の鱗」、「秘呪」といった語は、プラスのイメージでは捉えにくい。賢治は「小岩井農場」で、「じぶんとそれからたったもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする／この変態を恋愛といふ」と書いたが、晩期の賢治は、こうした抑制を批判し、恋愛や性を肯定的に描こうとしていた。だとすれば、恋愛を批判的に描こうとしたのではなく、恋愛に対して懐疑的であったかつての自分をモデルにした人物を、客観的に描こうとしたのかもしれない。

**語注**

**猥れて嘲笑めるはた寒き**　読み方は下書稿㈢に付されたルビから「なれて」だろう。『定本語彙辞典』は「みだらな嘲笑は、また（＝はた）いかにも寒々と」とする。嘲笑は軽蔑の気持ちを込めて笑うという意味だが、ここでは男女が節度を失ってうちとけ、笑い顔を見せること。男性の笑いのことなのか、女性の笑いのことなのか、それとも両方のことなのかわかりにくい。高橋慶吾（「賢治先生」「イーハトーヴォ〔第一期〕1」（昭和十四年十一月）は、後年、賢治が小笠原露という女性とトラブルがあった際に、父・政次郎は「女の人に対する時は、歯を出して笑つたり、胸を広げてゐたりすべきものではない」と戒めたというが、賢治も男女の関係については政次郎と同じように思っていたのだろう。

**凶つのまみ**　不吉な眼付きということだろう。奥本淳恵（後掲A）は、「なれなれしく誘惑的に接近してくる女性のまがまがしい目」とし、「推測するなら、古語の「馴る」（男女の関係で、親しむ、なじむ）の意と漢語「猥」（みだら。男女間のだらしないこと）の意との両方を表現したかったということか」とする。読み方は「まがつ」であろうが、「まがつび」の語は「一百篇」にばかり何度か登場する語。これは日本神話にみえる神の名で、マガはよくないこと、ツは助詞で「の」の意味。ヒは神霊を示す。古事記や日本書紀によれば、伊弉諾尊が黄泉国のけがれを清めるための禊をした際に生まれたとされる。凶事を引き起こす神とされるが、後にこの神を祀ることで災厄から逃れられると考えられるようになり、厄除けの守護神として信仰されるようにもなった。

**火の鱗**　夕陽で赤く染まった鱗雲（巻積雲）のこと。秋を代表する雲で、天気が下り坂の時に出やすい。

**秘呪**　『定本語彙辞典』は「秋の冷たい西風が、荒々しく人間の秘密の呪力をそなえて吹く」としているが、下書稿㈢には「ひとの秘呪」を「きみが名を」に改める段階があり、下書稿㈠には「西風きみが名をとりて」とあることから、秘密にしている恋人の名前を西風に奪われたという意味だろう。

**粟の垂穂**　古くから食用に用いられた雑穀で五穀の一つに数えられる。ただ、作品の舞台は街中なので、同種の雑草エノコログサ（ネコジャラシ）のことだろう。

**評釈**

黄罫（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（藍インクで了）、その裏面に書かれた下書稿㈡、下書稿㈡を削除した後、すぐその下に書かれた下書稿㈢（タイトルは「判事」。その後「帰途」に変えようとして中止）、黄罫（2222行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈣（タイトルは「検事」、後に「判事」。㊢の印はどの原稿にもない）、定稿用紙に書かれた定稿の五種が現存。定稿の一行目末尾には読点がない。生前発表なし。『新校本全集』に指摘はないが、島田隆輔（後掲）は、「〔冬のスケッチ〕」の第四四葉が元になっていると指摘している。

まず、島田が指摘する「〔冬のスケッチ〕」から見てみたい。

点々かける赤のうろこぐも
寂まりの桐のかれ上枝

※

火はまっすぐに燃えて
あるひは見えず
このとき
鳩かゞやいて飛んで行く。

※

灰いろはがねのいかりをいだき
われひとひらの粘土地を過ぎ
がけの下にて青くさの黄金を見
がけをのぼりてかれくさをふめり
雪きららかに落ち来れり。

最後の章は「未定稿」の「〔卑屈の友らをいきどほろしく〕」の下書稿であると『新校本全集』にも記されているものだが、稗貫農学校時代の学校周辺を舞台にしたものとして、本作との関連も深いと思われる。

さて、〔猥れて嘲笑めるはた寒き〕の下書稿㈠は次のようなものとなっている。

寂まりの桐のかれ上枝（ほづえ）
翔くるは赤きうろこ雲

あゝまた風のなかに来て
かなしく君が名をよべば
あけびのつるのかゞやきて
鳥は汽笛を吹きて過ぐ

「〔冬のスケッチ〕」が元になっているのは明らかだが、この後は「うろこ雲」という言葉以外は消えてしまう。新しく加わった後連のモチーフは、奥本淳恵（後掲B）も指摘するように『春と修羅（第一集）』所収の「マサニエロ」と関連が深いようである。

城のすすきの波の上には
伊太利亜製の空間がある
そこで鳥の群が踊る
白雲母（しろうんも）のくもの幾きれ
（濠と橄欖（かんらん）天蚕絨（びろうど）、杉）
ぐみの木かそんなにひかつてゆするもの
七つの銀のすすきの穂

（お城の下の桐畑でも、ゆれてゐるゆれてゐる、桐が）
赤い蓼（たで）の花もうごく
すゞめ　すゞめ
ゆつくり杉に飛んで稲にはいる
そこはどての陰で気流もないので
そんなにゆつくり飛べるのだ
（なんだか風と悲しさのために胸がつまる）
ひとの名前をなんべんも
風のなかで繰り返してさしつかえないか
（もうみんな鍬や繩をもち
　崖をおりてきていゝころだ）
いまは鳥のないしづかなそらに
またからすが横からはいる
屋根は矩形で傾斜白くひかり
こどもがふたりかけて行く
羽織をかざしてかける日本の子供ら
こんどは茶いろの雀どもの抛物線
金属製の桑のこつちを
もひとりこどもがゆつくり行く
蘆の穂は赤い赤い
（ロシヤだよ、チエホフだよ）
はこやなぎ　しつかりゆれろゆれろ
（ロシヤだよ　ロシヤだよ）
烏がもいちど飛びあがる
稀硫酸の中の亜鉛屑は烏のむれ
お城の上のそらはこんどは支那のそら
烏三疋杉をすべり
四疋になつて旋転する

制作日付は大正十一年十月十日となっているが、まだ稗貫農学校から花巻農学校に改称する以前、若葉町に移転する以前で、文語詩も季節は秋でイメージは繋がっている。「お城の下」や「赤い蓼の花」、「蘆の穂は赤い赤い」という言葉も関連性があるかもしれない。何より「ひとの名前をなんべんも／風のなかで繰り返してさしつかえないか」は決定的だと思う。

　この「ひとの名前」について、恩田逸夫（「補注（春と修羅）」（『日本近代文学大系36 高村光太郎・宮沢賢治』角川書店 昭和四十六年六月）は、タイトルのマサニエロ（オーベール「ボルティチの唖娘」の主人公の名前）から、兄と妹の密接なつながりを思わせ、また前行の「悲しさのために」から妹トシを指すのではないかとする。しかし、恩田は『春と修羅（第一集）』所収の「松の針」に、「おまへがあんなにねつに燃され／あせやいたみでもだえてゐるとき／わたくしは日のてるとこでたのしくはたらいたり／ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた」とあることから、賢治の恋人を指した可能性についても書いている。『春と修羅（第一集）』を書いていた頃の賢治には、例えば「第四梯形」で「青い抱擁衝動や／明るい雨の中のみたされない唇が／きれいにそらに溶けてゆく／日本の九月の気圏です」と書き、また「一本木野」で「こんなあかるい穹窿と草を／はんにちゆつくりあるくことは／いつたいなんといふおんけいだらう／わたくしはそれをはりつけとでもとりかへる／こひびととひとめみることでさへさうでないか」と書くような、具体的な恋愛対象がいたようで、栗原敦（「資料と研究・ところどころ⑪ 新校本全集訂正項目・「きみにならびて野にたてば 賢治の恋」の〈詩〉読解のこと」「賢治研究115」宮沢賢治研究会 平成二十一年十月）も、「『春と修羅』の時代に、賢治に交際のあった女性が実在したことは、かつて小沢俊郎が記したとおり事実です。旧校本全集編纂時にそれが紹介されようとしていたことも事実です。そして、事情があって公表の機会が失われたことも小沢の直話（昭和54・9・24）として承知しています」と書くとおりである。ここでも、恋人説を取りたいと思うが、だからといって解釈がこれ以上に進むというわけでもない。ただ、風の中で恋人の名前をつぶやくというようなことが、実体験としてもあったようだということは記憶しておいてもよいかと思う。

しかし、下書稿㈠を手入れする段階では、「土木主幹のせなひろく／線路に添ひて帰り行く」と第三者を主人公にする構想が立てられ、以降、下書稿㈢ではタイトルが「判事」、下書稿㈣では「検事」と、文語詩についてよく指摘される私性の排除がなされている。定稿になるとタイトルもなくなって、誰を視点にしたものなのか、どのような相手への思いなのかも分かりにくい作品になっている。

ただ、注意しておきたいのは、恋愛感情を描くのに「猥」、「嘲笑」、「凶つ」、「火の鱗」、「秘呪」と、プラスのイメージでは捉えにくい語が用いられていることだ。妹トシが病床にあったことからくるやましさ、また、「小岩井農場」で書かれたように、「じぶんとひとと萬象といっしょに／至上福しにいたらうとする／それをある宗教情操とするならば／そのねがひから砕けまたは疲れ／じぶんとそれからたったもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいっしょに行かうとする／この変態を恋愛といふ」という宗教的な思いからする恋愛に対する禁忌の意識がそう書かせたのかもしれない。しかし、文語詩制作中の賢治は、森荘已池に「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい。」（「昭和六年七月七日の日記」『宮沢賢治の肖像』昭和四十九年十月　津軽書房）と語っているような思いを抱いてもいたようで、文語詩定稿には、その表れとも思えるような作品が散見されることから、賢治には恋愛や性をむしろ謳歌する意識があったように思われる。だとすれば、本作は恋愛を批判的に描こうとしたのではなく、さまざまな人々を描く中での一つの例として、過去の自分を第三者のように客観的に描こうとしているように思えてくる。

それにしても、賢治の恋愛経験などが具体的にわかると、単に興味深いというだけでなく、文語詩の解釈にも大きな発展が望めるのではないかという気がする。新しい資料の発見や紹介がされる日を待ちたい。

### 先行研究

島田隆輔「〔冬のスケッチ〕散逸稿／《文語詩稿》への過程から迫る試み」（『島大国文26』島大国文会 平成十年二月）

奥本淳恵Ａ「宮沢賢治文語詩稿〈双四聯〉の表現手法　詩篇「母」の場合」（『論攷宮沢賢治７』中四国宮沢賢治研究会 平成十八年七月）

奥本淳恵Ｂ「宮沢賢治の詩における外来語　口語詩篇「マサニエロ」と文語詩篇「〔あかつき眠るみどりごを〕」の場合」（『安田文芸論叢　研究と資料　第二輯』安田女子大学日本文学科事務局 平成二十二年三月）

## 45　岩頸列

①西は箱ヶと毒ヶ森（ドグ）、　椀コ、南昌、東根の、
古き岩頸（ネック）の一列に、　氷霧あえかのまひるかな。

②からくみやこにたどりける、　芝雀は旅をものがたり、
「その小屋掛けのうしろには、　寒げなる山にょきにょきと、
立ちし」とばかり口つぐみ、　とみにわらひにまぎらして、
渋茶をしげにのみしてふ、　そのことまことうべなれや。

③山よほのぼのひらめきて、　わびしき雲をふりはらへ、
その雪尾根をかゞやかし、　野面のうれひを燃し了（おほ）せ。

### 大意

西には箱ヶ森と毒ヶ森、椀コ、南昌山、東根山の、
古い岩頸の一列が並び、真昼だというのにほのかに氷霧が出ているようだ。

あちこちを巡り歩いてようやく都にたどりついた、旅芸人の芝雀は旅について語り、
「その小屋の後ろには、寒々しい山々がにょきにょきと、
立っていて気味が悪かったよ」とだけ喋ると口をつぐみ、笑いに紛らせながら、
渋茶をひんぱんにすすったというが、それもまことにもっともだ。

山よそろそろはっきりと姿を見せて、わびしい雲を振りはらってしまえ、
その雪の積もった尾根を輝かせ、野のどんよりした思いを燃やし尽くしてくれ。

### モチーフ

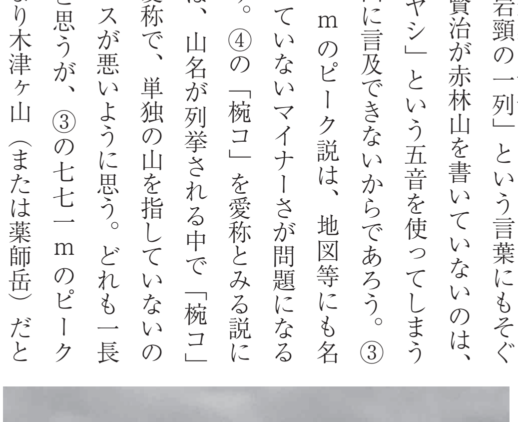
箱ヶ森から東根山に連なる岩頸列の景観の奇妙さについて、芝雀という（おそらくは）架空の旅芸人の視点を借りながら表現した作品。岩頸がにょきにょきと伸びていくものだというイメージは、賢治に親しいものだったようだ。唐突な旅芸人の登場は、永くここに住んだ者よりも、訪問者にこそ、その特異な風景が新鮮に感じられるものだと思ったからではないかと思う。

### 語注

**箱ヶ**　盛岡市、雫石町、矢巾町にまたがる箱ヶ森（八六五・五ｍ）のこと。「はこが」と読ませたかったのだろう。細田嘉吉（後掲Ｂ）によれば、南東の平地よりにある赤林山（八五五ｍ）と一緒に矢筈森と呼ばれ、また、本来は鉢ヶ森と呼ばれるべき赤林山と箱ヶ森が混同されていたという。平地から見れば当然目に着くはずの山を賢治が書かなかったのは「大正時代には「赤林山」の名称はまだまだ浸透していなかった」からだとする。大石雅之（後掲）や加藤碵一（「岩頸」『宮沢賢治地学用語辞典』愛智出版 平成二十三年九月）が書くように、大正五年三月発行（大日本帝国陸地測量部）の五万分の一地形図「日詰」には赤林山とあることから「浸透していなかった」とは言えないにしても、賢治が現在の赤林山のことを箱ヶ森と呼んでいた可能性は高い。松本隆（後掲）も、土地の古老が現在の赤林山を箱ヶ森と呼び、現在の箱ヶ森を枕森と呼んでいたという証言を紹介している。

**毒(ドク)ヶ森**　雫石町にある毒ヶ森（七八二ｍ）のこと。賢治が自ら「経埋ムベキ山」とした県内三十二の山のうちの一つにリストアップされている。

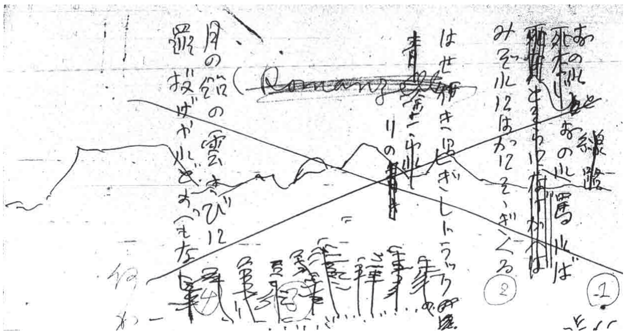
**椀コ**　他の山は実在するのに（いくつかの説が分かれている場合もあるが）、一つだけ実在が確認できないのが「椀コ」である。①毒ヶ森の南西約一・二キロ地点にある大石山（五二七ｍ）を指すという説（『語彙辞典』（平成元年十月 東京書籍）、奥田博（後掲Ａ）、村上英一（後掲）、『新語彙辞典』（平成十一年七月））、②平地側から見て最も近くに大きく聳えている赤林山（八五五ｍ）だとする説（大石雅之（後掲）、ブログ「宮沢賢治の里より」（http://blog.goo.ne.jp/suzukikeimori/ 平成二十三年二月二十八日～三月三日））、③南昌山の北側にある七七一ｍのピーク（木津ヶ山。山頂には薬師岳という札があるという）を指すという説（細田（後掲Ａ、Ｂ）、『新語彙辞典』初版 補遺（平成十二年八月）、『定本語彙辞典』（平成二十五年八月））、④「椀コ」は「お椀の形のような」という意味なので南昌山の愛称だとする説（宮城一男（後掲Ａ、Ｂ、Ｃ）、加藤碵一（後掲）、松本隆（後掲））が出ている。また、『新校本全集』では、「五十篇」の「〔月の鉛の雲さびに〕」の下書稿㈤～㈦の余白にある岩頸列の線画について、「連山は明らかに箱ヶ森・毒ヶ森・南昌山等の岩頸列の山々である」とし、「ただし、このスケッチでは、右から、箱ヶ森・毒ヶ森・南昌山・椀コ・東根山と並んでおり、文語詩「岩頸列」とは、南昌山・椀コの順序が食い違っている」とある。「椀コ」が、何山を指すのかという論議ではないが、①～④の論者の共感は得られそうにない見解を提出している。まず①の大石山説から検証してみたい。大石山は標高も低く、岩頸でもなさそうで、「一列」の語もふさわしくない。また、東方の矢巾町の側からは見えないという意味からも却下してよいかと思われる。②の赤林山説について、大石（後掲）は地図上で見て、箱ヶ森と毒ヶ森という西の列と、赤林、南昌、東根の東の列があるのだとするが、一望できるのは岩手山の頂上付近だというし、「岩頸(ネック)の一列」という言葉にもそぐわない。賢治が赤林山を書いていないのは、「アカバヤシ」という五音を使ってしまうと他の山に言及できないからであろう。③の七七一ｍのピーク説は、地図等にも名前が載っていないマイナーさが問題になるかと思う。④の「椀コ」を愛称とみる説については、山名が列挙される中で「椀コ」のみが愛称で、単独の山を指していないのはバランスが悪いように思う。どれも一長一短だと思うが、③の七七一ｍのピーク説、つまり木津ヶ山（または薬師岳）だと



木津ヶ山（または薬師岳・右）と南昌山（左）
手代森小学校前から

するのが一番無難であるように思う。細田の言うように、順番からしてここが最もふさわしいということ、そして写真を見ればわかるように「椀コ」のような形になっていると思われるからである。ただ、地図から立体的な山の仮想写真を作成できるソフト（カシミール３D）にて、いろいろ試してみたが、箱ヶ森、毒ヶ森、薬師岳、南昌山、東根山が一列にうまく並び、しかも薬師岳が「椀コ」のように見える場所は、見つけることができなかった。「〔月の鉛の雲さびに〕」の下書稿㈤～㈦の余白にある岩頸列の線画を見てみると、「椀コ」にあたる山が描かれておらず、東根山は花巻あたりからでなくてはあそこまで山頂部が平らには見えないはずだし、南昌山と思われる山との距離も近すぎ、ピークの数や高さも実際とは異なっていることから、あくまで記憶の中のものであってスケッチではなく、位置関係まではっきり描かれたものではなさそうだ。つまり、賢治が岩頸を愛したことは違いないにしても、どこの地点から見た時にどう見えるかについてまで、写真のように正確に把握しきれていたわけではないことを示していよう。従って、③説が最も無理がないもののように思うとしたが、順序の認識があいまいであったとすれば、それも絶対的なものだとは言えない。

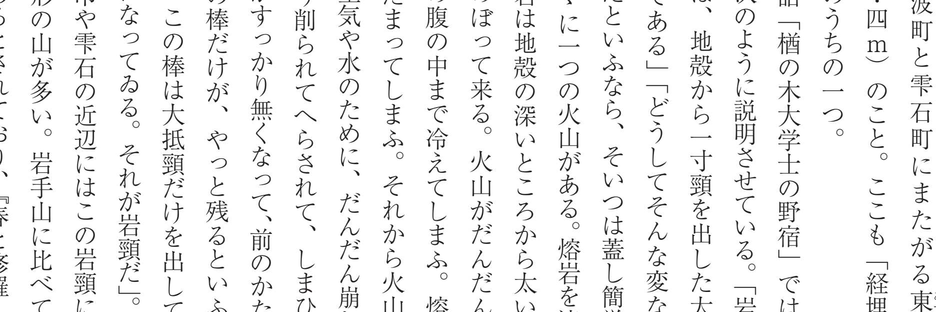
**南昌**　雫石町と矢巾町の境にある釣鐘型をした南昌山（八四八ｍ）のこと。盛岡では「南昌山に雨が降れば盛岡も雨」と言われる。この山の洞窟に青竜が住んでおり、毒気を吐いて雲を呼び、雨を降らせたという。元は毒ヶ森と呼ばれたが、元禄十六年に南部久信が毒の字を嫌って南昌山に改名したと言われる。頂上にはさまざまな石塔や石碑があり、地元の人たちの信奉も篤かったようだ。賢治が「経埋ムベキ山」とした県内三十二の山のうちの一つ。



「五十篇」の「〔月の鉛の雲さびに〕」の下書稿㈤～㈦の余白にある線画（宮沢賢治記念館蔵）

**東根**　紫波町と雫石町にまたがる東根山（あずまね）（九二八・四ｍ）のこと。ここも「経埋ムベキ山」のうちの一つ。

**岩頸**（ネック）　童話「楢の木大学士の野宿」では、大学士に次のように説明させている。「岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である」「どうしてそんな変なものができたといふなら、そいつは蓋し簡単だ。え、こゝに一つの火山がある。熔岩を流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰へて、その腹の中まで冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまふ。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られてへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなって、前のかたまった熔岩の棒だけが、やっと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になってゐる。それが岩頸だ」。岩手県の矢巾や雫石の近辺にはこの岩頸による奇妙な形の山が多い。岩手山に比べて古い火山であるとされており、『春と修羅（第一集）』の「小岩井農場」では、「あれはきっと／南昌山や沼森の系統だ／決して岩手火山に属しない」とある。



手代森小学校から岩頸群を臨む（カシミール 3D による）

**氷霧**　「細かな氷晶が多数空気中に浮かんで、霧のようにあたりがぼんやり見える現象。顕微鏡で氷晶を調べると、針状、柱状、板状などさまざまな形をしている。普通、気温が氷点下10℃あるいはさらに低いときに発生する。氷霧を通して太陽が見えるときは、その周りに暈（かさ）が現れたり、上下に延びる光柱が見えたりする。

氷晶の数が比較的少ないときは細氷とよばれる」（『日本大百科全書』）。「一百篇」の「〔うたがふをやめよ〕」等にも登場する。

**芝雀**　歌舞伎役者の三代目中村雀右衛門（明治八年～昭和二年）は、四代目中村芝雀として明治末年から大正にかけて上方を中心に活躍した。細田（後掲Ｂ）は、芝雀が盛岡劇場から岩頸を見たのだとし、松本（後掲）は、「賢治が東京に出ていた時に、たまたま歌舞伎を見に出かけた。その時舞台に立った歌舞伎役者の芝雀が」、「興業がうまく行かなかったことを、自分たちの失敗を棚に上げ、周りの山までけなして、後は渋茶を飲んでごまかした」のだとする。ただ、岩頸のにょきにょきした様子は盛岡からではリアルに感じられないと思われるし、「西は箱ヶと毒ヶ森」とあるのに、盛岡からだと「西」の方角とはならない。また、賢治の経験に基づいたものだとする必要もないと思う。村上（後掲）は、「田舎まわりの役者と考えられる。詩の音律を考えると読みは「しじゃく」」としているが、それに従いたい。

## 評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿（タイトルは「岩頸列」。鉛筆で㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の二種が現存。生前発表なし。先行作品や関連作品の指摘はない。

一連は岩頸が並ぶ冬の或る日の状況をそのままに詠み、二連ではこの地での経験を旅芸人が別の場所で第三者に語る場面、三連では再び岩頸を前にして、山に語りかけるような言葉がつづられるという構造の作品である。

賢治が岩頸を愛していたことは、その景観や特性だけでなく、松本隆（後掲）がいうように、中学校時代の友人・藤原健次郎と何度も訪れた記憶とも関わっていたと思われるが、童話「楢の木大学士の野宿」にも、その魅力は充分に語られている。「歌稿〔Ｂ〕」の大正四年四月の項に、賢治は「240　毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかにくる」という短歌を残しているが、鈴木健司（後掲）は、「毒ヶ森、南昌山のうちの一つが突然踊り立ち、伸びるようにして、遠く離れた自分の額に向かってくる、という内容の短歌」だと捉え、「楢の木大学士の野宿」にも「四人兄弟の岩頸で、／だんだん地面からせり上って来た」や、「注文通り岩頸は／丁度胸までせり出して」といった描写があり、岩頸四人兄弟の末子である「いたづらの弟」が、「そんなら僕一つおどかしてやらう」と、「光る大きな長い舌を出して／大学士の額をべろりと嘗めた」といった記述があることに関係を見出している。「岩頸列」では、芝雀に「寒げなる山にょきにょきと、／立ちし」ことを報告させているが、これは岩頸が伸びていることの表現であり、芝雀は、これに驚いてみやこに逃げ帰ったのだろうと言う。

賢治は見間違いや思い違いについて、好んで詩にしている。例えば『春と修羅（第一集）』の「高原」には、

海だべがど、おら、おもたれば
やつぱり光る山だたぢやい
ホウ
髪毛　風吹けば
鹿踊りだぢやい

とある。間違いではあっても、「海のように思えた」という錯覚、心の動きこそが重要なのだろう。しかし、二度目に同じ場所を訪れれば、もうその「光る山」は山にしか見えず、決して「海」だとは思わないだろう。つまり、経験を重ね、学習することによって、心の動きは抑制されてしまうのである。

『注文の多い料理店』の「広告ちらし」で、賢治は、自分が書いた物語は、「卑怯な成人たちに畢竟不可解」ではあっても、「純真な心意の所有者たち」ならば、「どんなに馬鹿げてゐても、難解でも必ず心の深部に於て万人の共通である」と書いた。経験や知識が乏しいゆえに、「純真な心意」の持主である子供は多くの誤りを犯すが、それゆえに感じるはずのものが感じられなくなってしまう大人よりも、ずっと本質を見抜ける、ということなのだろう。

『注文の多い料理店』所収の童話「どんぐりと山猫」では、山猫からのハガキをもらった一郎は、うれしくて夜も寝られず、朝になって「おもてにでてみると、ま

はりの山は、みんなたつたいまできたばかりのやうにうるうるもりあがつて、まつ青なそらのしたにならんでゐ」るのを発見する。山を生命感にあふれたものにするのは、人間の心、すなわち「純真な心意」である。村上（後掲）は、この「うるうる」と本作における「にょきにょき」に類縁性を見出していたが、これは岩頸がにょきにょきと伸びるように感じられるという鈴木（後掲）の論にも繋がっていきそうだ。純真な心意の持ち主にこそ、岩頸は恐ろしいものに感じられやすいのだ。

さて、本作では旅芸人が岩頸をにょきにょきと伸びていくように感じたとしているが、旅芸人は子どもではない。しかし、いつも同じ風景を見ているわけではない人間であるからこそ、新鮮な感覚で風景に向き合うことができ、その結果として、子どものように「純真な心意の所有者」になり得たということなのだろう。

日本中を歩き回り、さまざまな土地の名勝や奇景を見てきた旅芸人であっても、この岩手の奇景は珍しく、驚くべきものなのだ。賢治は岩手の人々に対して、自分たちが見慣れてしまった光景を再発見させようとしていたのであろう。古くは海外における浮世絵ブームが日本における浮世絵の見直しに繋がり、近年では、海外におけるクールジャパンの声が、日本のオタク文化を再評価させた例もあるが、賢治はそんな効果を、この旅芸人・芝雀に負わせたかったのだと思う。

賢治は北海道への修学旅行に農学校の生徒を引率した際の「〔修学旅行復命書〕」（大正十三年）に次のように書いている。

車窓石狩川を見、次で落葉松と独乙唐檜との林地に入る。生徒等屡々風景を賞す。蓋し旅中は心緒新鮮にして実際と離るゝが故に審美容易に行はるゝなり。若し生徒等この旅を終へて郷に帰るの日新に欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まんか孰れかかの懐かしき広重北斉古版画の一片に非らんや。実に修練斯の如くならざるよりは田園の風と光とはその余りに鈍重なる労働の辛苦によりて影を失ひ、農業は傍観して神聖に自ら行ひて苦痛なる一の skimmed milk たるに過ぎず。

旅人の目で見直してみれば、この岩手は驚くべき景観に満ちている。そんな思いが、本作にも込められていたのではないだろうか。気味の悪いぞっとする山。それこそが、賢治がこの一連なりの岩頸列に対して送った最大限の〝賛辞〟であったように思うのである。

**先行研究**


宮城一男Ａ「南昌山・葛丸川」（『宮沢賢治　地学と文学のはざま』玉川大学出版部　昭和五十二年四月）

小沢俊郎「賢治原稿雑見」（『小沢俊郎宮沢賢治論集1』有精堂　昭和六十二年三月）

宮城一男Ｂ「文語詩稿の地質学」（「〔雪渡り〕弘前・宮沢賢治研究会会誌５」弘前・宮沢賢治研究会　昭和六十二年九月）

奥田博Ａ「毒ヶ森・椀コ（大石山）」（『宮沢賢治の山旅』東京新聞出版局　平成八年八月）

奥田博Ｂ「東根山・南昌山」（『宮沢賢治の山旅』東京新聞出版局　平成八年八月）

村上英一「岩頸列」（『宮沢賢治　文語詩の森』柏プラーノ　平成十一年六月）

宮城一男Ｃ「〝農民の地学者〟としての生活」（『宮沢賢治　農民の地学者』築地書館　平成十一年七月）

細田嘉吉Ａ「「椀コ」はここだ」（「宮沢賢治記念館通信67」宮沢賢治記念館　平成十一年八月）

細田嘉吉Ｂ「文語詩「岩頸列」の〝椀コ〟考証」（『石で読み解く宮沢賢治』蒼丘書林　平成十八年五月）

加藤碵一「賢治の地質学とその背景」（『宮沢賢治の地的世界』愛智出版　平成十八年十一月）

大石雅之「宮沢賢治の『岩頸列』のある山地に関する一考察」（「岩手の地学39」岩手県地学教育研究会　平成二十一年六月）

松本隆「賢治の詩「岩頸列」の「椀コ」についての考察」（『童話『銀河鉄道の夜』の舞台は矢巾・南昌山』ツーワンライフ　平成二十二年十一月）

鈴木健司「「岩頸」意識について」（『宮沢賢治における地学的想像力　＜心象＞と＜現実＞の谷をわたる』蒼丘書林　平成二十二年五月）

## 46　病技師〔一〕

①こよひの闇はあたたかし、　風のなかにてなかんなど、
　ステッキひけりにせものの、　黒のステッキまたひけり。
②蝕む胸をまぎらひて、　こぼと鳴り行く水のはた、
　くらき炭素の燈(ひ)に照りて、　飢饉(けかつ)供養の巨石並(おほいしな)めり。

**大意**

今宵の闇はどこかあたたかい、風に吹かれて泣いてこようかなどと、ステッキをひいた、偽物の、黒いステッキをまたひいた。

肺病からくる音と交りあって、コボッと鳴る水の脇で、暗闇の中のアークライトのあかりに照らされて、飢饉を供養するための巨石が並んでいる。

**モチーフ**

「〔冬のスケッチ〕」から、複雑な過程で成立した作品だが、岩手の飢饉に立ち向かうべき技師が思い半ばで肺病に罹ってしまった無念さを詠んでいるように思う。「風のなかになかん」や「ステッキひけりにせものの」は、賢治自身には思い入れのある句であったのかもしれないが、ニュアンスがつかみにくい。

**語注**

**病技師**　「〔冬のスケッチ〕」に発した若い時代の作品であるため、賢治をモデルとした人物ではないのかもしれないが、文語詩が晩年に書かれたことを思うと、賢治その人の行状や思想も託されていると考えるべきだと思う。尚、読み方について、三谷弘美（後掲）は「びょうぎし」、萩原昌好（「病技師〔二〕」『宮沢賢治文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）は、「やまいぎし」と読ませている。ここでは「びょうぎし」としたい。

**ステッキ**　洋風の杖のこと。「17世紀から19世紀にかけて、イギリスではスナッフ・ボックス snuff box（かぎタバコ入れ）とともに、紳士の最も重要なアクセサリーと考えられていた。とくに休日の散策や礼装には欠かせないものとされた。フランスでは女性の散歩のさいのアクセサリーとして流行した。19世紀には女性は長柄のパラソル、男性は洋傘をステッキ兼用のアクセサリーとした。これらの風習は徐々に衰えながらも1960年代ごろまでつづいたが、70年代には完全に消滅した。日本では明治時代に輸入され、一時はかなりの普及をみた」（『世界大百科事典』）とある。また、巌谷小波のエッセイ「指輪とステッキ」（『女子処世 ふところ鏡』大倉書店　明治四十年十一月）では、「指輪とステッキ。前者は女の飾りで、後者は男の伊達、共に文明的贅沢品なのである」とあり、「この頃はわざと半程(なかほど)を握って、鈕(つまみ)の方を下へ向けて提げたり、またちと手の冷たい時には、外套の胸の鈕の所へ引かけたり、又手と一所に衣兜(かくし)へ突込んだりして行く。これでは無い方がよさゝうなものだが、それでも矢張り持つて居る所、即ち紳士の伊達とする所と見える」。「兎に角今日のステッキなる物は、もはや護身の実用を離れて、紳士の容儀を作る道具、或は歩行中の無聊を紛らす、一種の玩具たるに過ぎない」とされ、歩行のための補助用具としてのイメージはほとんどなかったようだ。ただ、「病技師」というタイトルを持つ作品であり、また賢治が盛岡高等農林学校の卒業生であったことを考えれば、土性調査の時に使う検土杖(けんどじょう)のことをステッキと呼んだ可能性も考えられてよいだろう。長さは約一ｍほどで、地中にこれを差し込んで、先端についた土壌を採取する。英語では「ボーリングステッキ」というらしい。「未定稿」の「〔霧降る萱の細みちに〕」に「検土の杖はになへども」とある。また、童話「さいかち淵」には「手にはステッキみたいな鉄槌をもって」歩く人物が登場している。宮城一男（「〝農民の地学者〟としての生活」『宮沢賢治 農民の地学者』築地書館 昭和五十年一月）によれば、弟の清六は、賢治が愛用したハンマーは六十センチほどあったというので、これを指した可能性もあろう。

**にせもの**　三谷弘美（後掲）は、本作におけるこの言葉が下書稿から定稿まで活か

されていたことから「だいぶ気に入っていた」のだろうとし、他の用例から「〝にせもの〟といっても決して悪いニュアンスではない、ということ。共通しているのは、光に関連があるということだ。「病技師〔二〕」の下書稿にも「ステッキひかるにせものの／黒のステッキまたひかる」とあり、いずれも光っている状態が一瞬のうちに存在し、それが最高潮の状態として〝にせもの〟に相対している。光っている状態は、まるでスポットライトを浴びたかのように浮かび上がり、他の周りの物全てが闇に沈む、そういった状況ではあるまいか。本来は日常の中に埋もれて目立たぬものでも、光を媒体としてよりレベルアップする一瞬があり、その一瞬だけがほんものになる――ゆえににせものなのである」とする。島田隆輔（後掲B）は、「技師としてこれまでにその身をあずけ、なしてきたことが、結局「にせもの」であったことを、ステッキというものに託して示唆しているのではないか」とする。賢治にとってこだわりのある表現ではあったようだが、両者の解釈も決定打とは思いにくい。両者の意見とは異なるが、視点人物は何らかの理由で「風のなかにてなかん」として家を出たのだが、そのようなことを家人や町の人に知られないようにするために、ステッキ（あるいは検土杖？　ハンマー？）を、そのカモフラージュのために用いた（つまり「にせもの」）、という可能性もあろうかと思う。あるいはもっと即物的に、検土杖やハンマーは、いわゆるステッキではないのだから、それを「にせものの」「ステッキ」である、と書いたのかもしれない。「病技師」のタイトルからすれば、案外これが一番スッキリした考え方なのかもしれない。

**まぎらひて**　「まぎらふ」は入り混じって見分けがつかなくなること。肺結核で胸を蝕まれた結果、呼吸するたびにコボコボという水泡音（湿性ラ音）が聞こえ、それが小川の水音と交じってしまったということだろう。昭和八年九月十一日の柳原昌悦宛書簡に「今度はラッセル音容易に除こらず、咳がはじまると仕事も何も手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られなかったり、中々もう全い健康は得られさうもありません」とある。

**炭素の燈（ひ）**　炭素棒を放電させ、弧形（アーチ型）の強い光を出させたもの。アークライト。

**饑饉（けかつ）供養の巨石（おほいし）**　花巻市双葉町にある浄土宗・松庵寺にある供養塔のこと。宝暦、天明、天保といった大饑饉の際に施粥釜で救済にあたり、北は八戸から、南は若柳（宮城県）から訪れる者がいたという。それでも餓死する者も多く、彼らを弔って埋葬し、供養塔が建てられることとなった。大きいものは一五〇センチほどになる。

## 評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第十三葉に鉛筆で手入れした下書稿㈠、「〔冬のスケッチ〕」第三八葉（下書稿㈢にそのまま生かされている）に書かれた下書稿㈠、黄罫（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（赤インクで(了)）、黄罫（260行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈢（藍インクで(了)。手入れ段階で「春」のタイトル案）、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈣（タイトルは「夜」、次いで「〔亡友〕」）、その裏面に書かれた下書稿㈤（これ以降の全てに「病技師」のタイトル）、その余白に書かれた下書稿㈥（鉛筆で㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の七種が現存。生前発表なし。下書稿㈡の後半が「一百篇」の「〔ひかりものすとうなゐごが〕」に、また、『新校本全集』で下書稿㈢の内容が「未定稿」の「〔郡属伊原忠右エ門〕」に類似していることが指摘されている。

　下書稿㈠の初期形態から見ていこう。

※

風の中にて
ステッキ光れり
かのにせものの
黒のステッキ。

※

風の中を
なかんとていでたてるなり
千人供養の
石にともれるよるの電燈

※

やみとかぜとのなかにして
こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし歩みさる
西天なほも　水明り。

下書稿㈡では、下書稿㈠の後半の二連（「風の中を」と「なほさながらに」）を元に、

風の中を
なかんとていでたてるなり
千人供養の
石にともれる二燭の電燈

やみとかぜとのかなたにて
光りものとも見えにける
こなにまぶれし水車屋は
にはかにせきし身を折りて
水明りせる西天に
いとつゝましく歩み去る

とされ、下書稿㈢は、下書稿㈠の前半一連（「風の中にて」）と下書稿㈠'とされる「〔冬のスケッチ〕」第三八葉の「眩ぐるき／ひかりのうつろ、／のびたちて／いちじくゆるゝ／天狗巣のよもぎ。」が合体されて成立する。

めまぐるきひかりのうつろ
のびたちて
いちじくゆるゝ天狗巣のよもぎ

風のなかにて
ステッキ光れり
かのにせものの
黒のステッキ

ただ、これ以降の段階では、下書稿㈡にあった「光りものす」や「水車屋」のモチーフが「一百篇」の「〔ひかりものすとうなゐごが〕」に引き渡される。参考までに同詩の定稿をあげておこう。

ひかりものすとうなゐごが、　ひそにすがりてゆびさせる、
そは高甲の水車場の、　こなにまぶれしそのあるじ、
にはかに咳し身を折りて、　水こぼこぼとながれたる、
よるの胡桃の樹をはなれ、　肩つゝましくすぼめつゝ、
古りたる沼をさながらの、　西の微光にあゆみ去るなり。

残った要素が「夜」と題された下書稿㈣になるが、だいぶ定稿に近づいている。

こよひの闇はあたゝかし
風のなかにて泣かんなど
ひとステット（ママ）をとりこしに

こぼと鳴り行く水のはた
饑饉（ケカツ）供養の石の上に
あかくともれる二燭の電燈（ひ）

下書稿㈢に「いちじくゆるゝ天狗巣のよもぎ」とあるが、三谷弘美（後掲）は「天狗巣のよもぎ」について「寄生した菌のため、そこから多数の枝がほうきのように生える病気」であることを指摘し、それを「胸を蝕む病巣のイメージそのもの」だ

とするが、その可能性は十分にあるだろう（ちなみに、三谷が指摘するように「いちじく」は果物の無花果（イチジク）ではなく、「著しく」の賢治流表現なのだろう）。そして「〔ひかりものすとうなゐごが〕」や下書稿㈣の「夜」における「こぼ（こぼ）」という水の音も、やはり三谷や赤田秀子（後掲）が指摘するように、肺病のイメージが重ねられているのだと思われる（もっとも「こぼこぼ」は賢治が愛した擬音語のようで、「春と修羅 第二集」の「一九五 塚と風 一九二四、九、一〇、」や「未定稿」の「〔こんにやくの〕」、散文「〔或る農学生の日誌〕」などに、ただ水の音として登場する）。

「〔冬のスケッチ〕」がいつ書かれたのかはわからないが、稗貫農学校で教鞭をとるようになった大正十年冬が含まれていることは確かだと思う。賢治には自分が肺をやられているという自覚が、大正七年に肋膜炎を病んだ時以降にはあったと思われるが、農学校教員時代の賢治が、果して自分が結核を発病し、肺の音をコポコポとさせていたとは思いにくい。生徒への感染を気にしただろうし、昭和七年二月十九日の杉山芳松宛書簡の段階でも、「肺炎后の気管支炎」と書き、「今度も幸に肺結核にはならずに済みました」としているからである。

では、なぜ「なかんとていでたてる」のかとなるが、即座に判断はできない。ただ、「〔冬のスケッチ〕」には恋愛（と宗教）の悩みのようなものが多く書き記されていることから、そんな思いからステッキを手に外に出たのではないかと思われる。そこで、千人供養塔を改めて見て（生家から一五〇mほどの所にあったので、普段ならその存在を気に留めることもなかっただろうと思う）、飢饉によって命を失った多くの人と、今、恋愛（?）の悩みで感傷的な気分になっている自分とを比較したのではないだろうか。

その向こうに、粉にまみれているために咳をしているのか、あるいは肺病であったのか、これも判然としないが、「あるじ」が咳をしている姿を見る。先述のとおり、このモチーフは文語詩「〔ひかりものすとうなゐごが〕」に引き渡されるのだが、肺病のイメージは下書稿㈣にもしっかりと受け継がれ、「こぼと鳴り行く水のはた」と暗示にとどめることなく、「夜」とあったタイトル案を「亡友」に書き換えさせてもいる。

かくして「病技師」のタイトルが下書稿㈤で付けられることになるのだが、この頃には、肺病を病んだ人間としての自分自身を語っている側面があっただろう。

こよひの闇はあたたかし
風のなかにて泣かんなど
蝕む胸を立ちいづる

闇と風とのなかにして
ステッキひかるにせものの
黒のステッキまたひかる

こぼと鳴り行く水のはた
饑饉（ケカツ）供養の石の上に
円くともれる二燭の電燈（ひ）

ここではもう、粉でむせただけかもしれない「あるじ」のことも、「亡友」のことも消えている。賢治自身とも思われる「病技師」が、胸の病をおして飢饉供養の石を見る姿だけが残る。

「〔冬のスケッチ〕」では自らの恋愛で悩んでいたようだし、肺病のモチーフも明らかではなかった。しかし、この段階以降、岩手の飢饉を救うべく奔走した技師が、思い半ばで胸を病んだというようにも読めてくる。定稿では、これをさらに凝縮するが、賢治の思い入れの強い詩句が読者の理解を妨げているきらいはあるにせよ、晩年の自分の心境を託した作品になったと言えるように思う。

## 先行研究

吉見正信「修羅のふるさと」（『宮沢賢治の道程』八重岳書房 昭和五十七年二月）
佐藤勝治「〝冬のスケッチ〟の配列復元とその解説」（『宮沢賢治青春の秘唱 〝冬のスケッチ〟研究』十字屋書店 昭和五十九年四月）
山口逵子「賢治「文語詩篇定稿」の成立」（『大谷女子大学紀要20－2』大谷女子大

学志学会 昭和六十一年一月）
小川金英「〈銀河鉄道の夜〉と花巻の習俗・信仰」（『宮沢賢治 7』洋々社 昭和六十二年十一月）
三谷弘美「病技師〔二〕」（『宮沢賢治　文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
赤田秀子「文語詩を読む　その 5　声に出してどう読むか？〔天狗茸　けとばし了へば〕を中心に」「ワルトラワラ16」ワルトラワラの会 平成十四年六月）
中路正恒「宮沢賢治と飢餓の風土「捨身の思想」とそのありか」（『東北学への招待』角川書店 平成十六年五月）
島田隆輔 A「初期論」（『宮沢賢治研究　文語詩稿叙説』朝文社　平成十七年十二月）
島田隆輔 B「原詩集の発展」（〈『宮沢賢治研究　文語詩集の成立 鉛筆・赤インク＜写稿＞による過程」〔未刊行〕平成二十二年六月）

## 47　酸虹

◎鵞黄の柳いくそたび、　窓を掃ふと出でたちて、
片頬むなしき郡長、　酸えたる虹をわらふなり。

### 大意

美しい黄色い柳の新芽が何度も、　窓をこすっているのを見てふと出で立ち、郡長は片頬だけで、　色あせた虹を見てふっとはかない笑みを浮かべた。

### モチーフ

郡長と言えば社会的な地位も高い一種の権力者であったが、柳の新芽や色あせた虹を目にして、ふっと表情をゆるめる。片頬だけのわずかな変化でしか感情を表現しない近代知識人の悲哀とを描こうとしたのではないかと思う。ただ、これを逆に考えれば、近代の官僚制においても、人間と自然のつながりは留めることができないのだという詩だとも解することができよう。

### 語注

**酸虹**　『定本語彙辞典』には「酒等が古くなると酸っぱくなるように、消えかかって色彩が薄くなった虹を指す」とし、「賢治の造語」とある。赤田秀子（後掲）は、文語詩における「酸」の語に注目し、「〔南風の頰に酸くして〕」、「コバルト山地」、「心相」（すべて「一百篇」所収）とともに本作をあげ、味の酸っぱさについては「未定稿」の「〔ひとびと酸き胡瓜を噛み〕」がある程度で、それ以外の使い方の方が多いことを指摘し、「かつて、すきとほった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのみ、イーハトーブという王国を築いた詩人は、文語詩創作に向き合っていたこの時期、風は酸っぱく、疲労を自覚させ、世界が酸えていく感触を感じていた。それはとりもなおさず詩人が心身の衰えを感じて負のエネルギーに敏感になっていたということであろう」とする。下書稿㈥には「さんこう」とルビを付けている。

**鵞黄**　ガコウと読む。ガチョウのヒナの淡黄色が美しいことから、菊、柳、酒などの黄色くて美しいものをたとえる。

### 評釈

「〔冬のスケッチ〕」の第四一・四三葉に書かれた下書稿㈠（タイトルは「光酸」）、黄罫（26０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「光酸」）、その余白に書かれた下書稿㈢（藍インクで㊂）、その裏面に書かれた下書稿㈣（タイトルは「郡衙」）、黄罫（22０行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈤、その裏面に書かれた下書稿㈥（タイトルは「酸虹（さんこう）」。藍インクで㊢）、定稿用紙に書かれた定稿の七種が現存。生前発表なし。関連作品等の指摘は特にないが、「〔冬のスケッチ〕」の第四一・四三葉は「未定稿」の「〔雲を濾し〕」の先行作品であり、第四二葉にある詩句は「一百篇」の「〔塀のかなたに嘉莵治かも〕」や「四時」にも登場することから原初的な経験やイメージは共通していたものと思われる。定稿に丸番号はないが、冒頭に◎があり、『新校本全集』では、これを「二行一連構成であることを示している」と解されるとしている。

本作については、下書の過程で内容が大きく変わっていったことが指摘されるが、

ここでも下書稿㈠から見ていきたい。

※　光酸

いつしか雲の重りきて、
光の酸をふりそゝぎ、
電線小鳥　肩まるく、
ほのかになきて溶けんとす。

春先の自然を詠んだもので、人間は登場しない。が、下書稿㈢では、この天気に誘い出されたかのようにして人間たちが現われる。
「〔冬のスケッチ〕」第四三葉には、下書稿㈠として先にあげた箇所に続いて「かぜのうつろのぼやけた黄いろ／かれ草とはりがね、郡役所／ひるのつめたいうつろのなかに／あめそゝぎ出でひのきはみだるる。」とあるが、これをひきついだのだろう。

あしたはかれ草のどて
柳硫黄の粒吐けるを、
鹿鳴館の古き貴賓、
上席書記頬痩せてわらひ来り

肥料倉庫の屋根の上に
エレキましろくうづまけば
青土いろのマント着て
技手は役所へ帰り来る

「鹿鳴館」というものものしいが「肥料倉庫」や「役所」ともあることから、舞台は明治時代の鹿鳴館ではなく、稗貫郡の郡役所であったようだ。賢治は稗貫農学校に勤務していたが、大正十二年四月に県立花巻農学校に改称・移転するまで、すぐ近くに稗貫郡役所があった。ちなみに郡役所も大正十五年六月には廃止され、郡長もいなくなるが、「郡長」の語は文語詩定稿にまで残されている。

さて、下書稿㈢の手入れ段階で、タイトル「酸虹」の元となった「酸えたる虹」がようやく登場する。一方、下書稿㈢に登場した「技手」は、下書稿㈣の手入れ段階では「放蕩ふかき農事技手」や「女蕩しの農事技手」というストレートな表現が取られる方向が示されるが、下書稿㈤では次のようになる。

牛酪（バタ）の粒噴く柳（やなぎ）の糸（いと）
しばしば掃ふ窓にして
頬はむなしき　郡長（こほりをさ）
ねむたく虹を　ながめたり

このとき土手の　かれ草を
青にびマント　ひるがへし
蚕桑技手の　黒長（くろちよう）は
酔ひて村より　帰りくる

宮沢健太郎（後掲）は、「表出者は、はじめこの詩に「酸光」（朝日のまぶしい光）と題していたのだがそれがしだいに郡長のつかれ切った頬の感じ、農事技手の放蕩で疲弊した感じを中心に、疲れを「酸える」と転じ、光を虹と変え「酸虹」、と視点をしぼっていったのである」とする。

下書稿㈥になると、「技手の黒金」が「後備大佐の甲斉」に変えられたのち、最終的には削除され、定稿では「郡長」のみを生かしたすっきりした二行詩になっている。「一百篇」所収作品に「〔燈を紅き町の家より〕」があり、これは郡役所からの電話であると偽って売笑婦が仕事場に電話をかけてくるという内容のものだが、テーマが重複するところを気にして本作の方でこのアイディアを削ったのではないかと思う。

理由はともあれ、せっかくドラマチックな要素が生まれたところで、賢治は早々

に引っこめてしまったわけである。それでは賢治が描きたかったのは、いったい何だったのだろうか。

「酸えたる虹」と言いたいところだが、虹が登場するのは下書稿㈣以降である。人間の登場でさえ下書稿㈢からである。となると、当初から一貫しているものは、春先の光のみである。もちろん当初から変化していないものこそが最も重要な要素だとは即断できないにしても、春先の光と人間との関わり、ということが結局のところ最大のテーマだったように思えるのである。

春と言えば、眠っていたものが一斉に生気を帯びて活躍しはじめる季節である。ことに東北地方では冬と春の差は顕著であろう。そして、性欲が頭を擡げる時期であり、『春と修羅』の春でもある。賢治はここで、具体的な事件や物語を織り込むのでなく、その嬉しくも妖しい春の雰囲気を出そうと思ったのではないだろうか。

ところで、「片頬」の用例を探してみると、「五十篇」の「〔氷柱かゞやく窓のべに〕」に「赤き九谷に茶をのみて、／片頬ほゝえむ獺主幹、／つらゝ雫をひらめかす。」と登場し、また、「春と修羅 第三集」の「七二六 風景 一九二六、七、一四、」に、「松森蒼穹（そら）に後光を出せば／片頬黒い県会議員が／ひとりゆっくりあるいてくる」という風に登場する。その他の例は探し出せていないが、少なくともこの三例を見る限り、彼らは中小の権力者の肩書を持っているという点で一致している。彼らは、もともとの性格というより、おそらくはその職務から感情を全面に出すことが許されないために、「片頬」でしか感情を表すことができないのだろう（「片頬黒い」は表情を表しているのではないかもしれない）。近代に生きる人間がどれほど抑圧されているかを示すものとも思える。

しかし、本作が中小の権力者を覆っている近代の圧力を描いているのだという以外の捉え方をすることも、できるかもしれない。

> 虔十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのでした。
>
> 雨の中の青い藪を見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔けて行く鷹を見付けてははねあがって手をたゝいてみんなに知らせました。
>
> けれどもあんまり子供らが虔十をばかにして笑ふものですから虔十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。
>
> 風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは虔十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑へて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。
>
> 時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒いやうなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑ひました。

童話「虔十公園林」の一節である。春先の光に誘われて郡役所を出て色あせた虹を見あげ、片頬だけ表情を緩める郡長は、もしかしたら虔十と同じ心性を持った人物なのかもしれない。権力者の肩書を持つ人間として、「ばかにして笑」われてはなるまいと精一杯にがまんしながら、やはりどうにも春先の自然現象の変化がうれしくてたまらないために片頬だけ微笑をうかべてしまう人物だと解することはできないだろうか。そう思えば、わずか二行にしか過ぎない作品を、五度にもわたって改稿をしたのも理解できるように思うのである。

## 先行研究

宮沢賢治「賢治の語彙をめぐって」（『宮沢賢治　近代と反近代』洋々社 平成三年九月）

宮沢健太郎「『文語詩稿一百篇』」（『国文学　解釈と鑑賞65－2』至文堂 平成十二年二月）

赤田秀子Ａ「文語詩を読む その7 酸っぱいのは南風？ 虹？「酸虹」他」（『ワルトラワラ18』ワルトラワラの会 平成十五年六月）

赤田秀子Ｂ「シダレヤナギ（バビロン柳・枝垂柳）」（『イーハトーブ・ガーデン 宮沢賢治が愛した樹木や草花』コールサック社 平成二十五年九月）

# Explanatory Notes on Miyazawa Kenji's *Poems in Literary Style 100* Part5

NOBUTOKI Tetsuro

**Abstract** :  This is the fifth part of the series of explanatory notes and critical comments on *Poems in Literary Style 100* written by Miyazawa Kenji in his later years. This paper covers the five poems, "Asa（A Morning）", "Narete Azameru Hata Samuki（I Shudder to Think of Grimacing）","Gankeiretsu（A Chain of Volcanic Neck）, "Byogishi（A Sick Engineer）", "Sanko（Sour Rainbow）".